「精神と力の自滅的不和」

A・キセリョフ（訳・渡辺雅司）

ロシア革命の起源を研究するにあたり、フェドトフ〔一八八六～一九五一年〕は多大な注意を専制の進化、権力と教会、社会と国家の関係という問題に振り向けた。フェドトフは一方で或る段階で社会を固定化させてしまった歴史的伝統を、他方で国家機構の土台を洗い流してしまい、それからの出口を二〇世紀初頭になって権力がどうにも見出せなくなってしまった袋小路へと追い込んでしまった諸現象を明らかにすることに努めた。彼は一八世紀こそ貴族帝国の最盛期、絶対主義の勝利ととらえ、それがロシアの帝国としての威光と栄光を確立する上でしかるべき役割を果たしたのだった、と述べた。それと同時に、開花に衰退はつきものであり、力は時に弱さに裏返る。なぜなら精神に裏打ちされず、それと「反目」してしまった力は魂がすでに捨てた肉体のようにその運命は埋葬を待つのみである。「精神と力」の分裂こそ専制崩壊の主原因であった、とフェドトフは考えたのだった。

「二つの力がロシア帝国を支え、築き上げた。第一は受動的な力、すなわち人民大衆の無尽蔵な忍耐力と忠誠心であり、もう一つは行動的な力すなわち、貴族層の軍事的剛毅さ、国家意識であった。」とフェドトフは書く。これら二つの力を束ねたのが専制政治であった。

太古よりルーシではツァーリ権力の理念は神の摂理に結び付けられ、聖書の権威、聖なる長老制の遺産に支えられてきた。そこにはツァーリ権力が神によってさだめられた特別の本性を備えているという記述がふんだんにある。**「正教を信じるロシアの民のツァーリに対する忠誠心は西欧の国民の君主に対する忠誠心とは全く別物である。」**とオプチナ修道院の長老ヴァルソノフィイ〔一八四五～一九一三年〕は書いている。**「西欧では国民は君主の中にある自分自身を愛しているに過ぎない……わがロシアではそれとはまったく違う。われらがツァーリは神の意志の代弁者であり、われわれがツァーリを愛するのは神を愛するからである」**

神への愛、神への献身からツァーリへの忠誠が生まれる。同様の思想はロシア正教会の多くの著名な代表者によっても述べられている。クロンシタットの聖ヨアン〔一八二九～一九〇八年〕は神がツァーリとナロード（民）を一つの全体として結合する神秘的な行為としてのツァーリ戴冠の秘儀の意義を特に強調した。**「聖塗油とツァーリの位への代々のツァーリの荘厳な戴冠式は、全能の神から地上のツァーリに賦与された恵、力と権力の象徴である。」**と彼は説いた。君主、ロシアの専制の持つ霊的意義についての完全かつ体系的な叙述は隠者聖フェオファン〔一八一五～一八九四年〕の**『キリスト教説教集』**にみられる。そこには神を前にした祖国の安寧を保証するためにツァーリとナロードが相互に責任を持つという思想が明確に展開されている。

正教的意識からすると、ツァーリ権力とは歴史的存在が神の意志と出会う一点なのである。ロシアの君主制はさかのぼればその根を正教に持っている。ここにこそロシアの国家制度の異例の堅固さがある。権力の力は大多数の住民の精神と信仰の力に支柱を見出し、神への愛によってはぐくまれてきたのだった。ルーシにあっては**「ツァーリの理念」**は君主自身の存在以上のものであり、ツァーリの務めは役人たちにとって神ご自身により課された修行、キリストを信じるものとしての道徳的義務と受け止められた。**「王の税を負担する」**ものは内面的に自由である。な

ぜなら君主及び国家への義務は正教的な世界観と一致するのであり、自然かつ必須なものであり、正当かつ絶対なものであるからだ。ここから、モスクワ国家の厳格な規律、国家全体の利益を擁護する上での強靭さ、ねばり強さが出てくるのである。ツァーリ権力の理念は分領地自由民に対するモスクワ公の闘いを奮い立たせ、多くの点で統一ロシア国家建設の成功を保証したのだった。しかもルーシにあっては教会は西欧のように国家の上に君臨するのではなく、国家を道徳的に神聖化する使命を自らに課したのだった。ロシア正教会は独立国家としての民族的、宗教的意識の形成と確立において主柱の一つとなったのである。

クリコヴォの戦い〔一三八〇年九月八日〕に向かうドミートリイ・ドンスコイ〔一三五〇～一三八九年〕を奮い立たせた内的動機の一つがキリスト教信仰を守りたいという熱意だったことをここで触れておこう。ドミートリイ・ドンスコイは正教を信仰する公であり、正教の擁護者をもって自任していた。彼とセルギイ・ラドネシュスキー〔一三三二頃～一三九一年〕の相互関係は権力と教会の合意、修道士の権力への宗教教育、権力に対する教会の道徳的影響の強さを物語る格好の例である。聖セルギイは、俗世を捨てた修道会の代表であるとしても教会が自身を社会から切り離さなかったことを、明確に示したのだった。国家の危急存亡の時にあたって、〔修道士の戦士としてクリクコヴォの戦いに参加した〕二人の修道士（ペレスヴェート〔一三八〇年没〕とオスリャーバ〔一三八〇年か一三九八年以後没〕）は、言葉の上では修道の誓を破っているが、心の底では神への愛と隣人への愛という二つの大事な戒律を果たしているのだ。

教会の努力のおかげもあって完遂された専制の確立は、それはそれでロシアの聖性の開花へとみちびいたのだった。フェドトフは強調する。

「モスクワ公の錫杖のもとでなされた全ルーシの統一、ツァーリの位へのイワン四世〔雷帝、一五三〇～一五八四年〕の戴冠、つまりビザンツ「世界」皇帝の権力、理念的に正教のツァーリの継承者としたことが、モスクワの民族的教会的自己認識を飛躍させたのだった。ロシア国の「聖性」、高潔な使命を表現していたのが聖者であった。ここから新たな聖者の列聖と年長の聖者のより一層正大な賛美の必要性が出てくる。かくて一五四七～一五四九年のマカーリエフ公会議のあとではロシア人聖者の数はほとんど二倍になったのである。」

ツァーリ権力の確立はルーシの国際的威信の強化に役立った。一五世紀の末、ヨーロッパの君主たちにとってイワン三世〔一四四〇～一五〇五年〕は単なる**「モスクワ大公」**に過ぎず、大汗国のハンたちからは、**「しもべのイワン」**とまで言われたのに対し、イワン四世は隣邦から**「全ルーシの生まれついての君主にして、ツァーリの称号を持った専制君主」**として受け入れられたのだった。全ヨーロッパの政治体制の形成という状況下で、ツァーリ権力という理念の実現はルーシの国家としての主権を確たるものにしたのだった。

ロシア専制の黎明期にあって、イワン三世が、モスクワ公がツァーリの位を獲得する上で、少なからぬ役割を果たしたことは忘れてはならない。彼にしてみれば古代世界の帝国の皇帝権力が理想だった。彼はモンゴルとローマという二つの政治的伝統に従ってモスクワ国家の威信を築こうとしたのだった。**「ビザンチン帝国の法的継承者の娘」**（正式にはローマのソフィア（ゾヤ）と呼ばれた）であるソフィア・パレオログ〔一四五五頃～一五〇三年〕との結婚は大きな国際的反響を呼んだ。ローマの元老院の目にはイワン三世はビザンチン皇帝の唯一の合法的継承者と映ったのだった。国際舞台の対局にいたカザン、アストラハン両汗国の王位に就

くモスクワの傀儡たちはイワン三世を「兄」いや「ツァーリ」とまで正式にみとめたのだった。チンギスカン直系のハンとの「兄弟関係」はモスクワ公がツァーリの称号を要求する法的根拠にとって重要なことだった。それゆえ一五四七年、イワン四世がツァーリの位に就いたとき、この事件は事実上存在したものが法的にも承認されたものと西でも東でも受け取られたのだった。彼に対して初めて塗油という教会の秘儀が執り行われた。ツァーリへの戴冠はツァーリの世俗的のみならず、宗教的承認を特に強調するものだった。戴冠式の重大な要素は信仰告白だった。まず初めにツァーリが信仰箇条を厳かに朗唱し、次いで署名し、府主教、さらには総主教の保管するところとなったのである。果たして一六歳のイワン四世がツァーリの称号を自分から受けると言い出したのだろうか。彼の周囲では当代きってのロシアの教養人であったマカーリイ府主教〔一四八二～一五六三年〕が大きな役割を果たした。新たな称号の助けを借りて彼はグリンスキイ一族〔イワン雷帝の母の出身のリトアニア系一族〕とともに君主の権威を高めたのである。府主教が年若いイワンにツァーリの称号は「**父祖伝来の官位なり**」との思想を吹き込んだことは大いにありうるだろう。このことを少年イワン四世は確信を込めて語っているのだ。

イワン四世の同時代人の多くは、彼のたぐいまれな敬虔を指摘している。彼は毎日特別に設けられた十字架の間で、しかも鉄鎖を身にまとって長い祈祷をささげたという。食事の際には、古き伝統にのっとって、自ら聖者伝を読むのだった。イワン雷帝が剃髪し、修道院に入ろうと欲していたとは有名な話である。彼は教会詩人であり、讃美歌や頌歌をものし、それは雷帝の死後何十年も歌われたという。ツァーリは修道院巡礼を好み、修道院には多大な金銭的寄付をし、寺院建設費用を寄進したのだった。かの有名なモスクワの聖なる愚者ワシーリイ・ブラジェンヌイ〔一四六九～一五五二年〕とツァーリは特別な関係をもって結ばれ、聖者が身まかったときには赤の広場の寺院にその名を冠し、雷帝自らその棺を運んだのだった。

当初府主教マカーリイの指導の下、イワン四世の活動は高邁な道徳的熱情に満たされていた。ツァーリは百項決議会議〔一五五一年にモスクワで開催されたロシア正教会の主教会議〕に対し新たな法令集〔「イワン四世法典」一五五〇年〕と地方統治令の評価をゆだねたのだった。というのも「**イワンは俗権と聖権、皇帝と聖者の区別をしていなかった**」からである。教会はツァーリの営為を清め、その祝福なしにはツァーリと言えども新機軸を打ち出すことはできなかったのだ。

しかしながらイワン雷帝時代のその後の府主教の選出は教会の大聖堂で執り行われたものの、すべてはツァーリの意のままであった。雷帝と府主教フィリップ〔一五〇七～一五六九年〕との確執（それは府主教の殺害で終わるのだが）は「**大公たちの専制が強化されるにしたがって，全ルーシの府主教の聖権が弱小化**」されたことを立証していた。ツァーリ権力神授説は結果的には、神の権力から自身の権力を区別することを否定することになったのである。雷帝の専制の理念は「**ツアーリの行動への教会の干渉を排する**」ことに向けられたのだった。彼は自らを神に召された信仰と敬虔の守護者と自任したのである。

正教王国という理念の独自性はイワン四世の解釈によると、国家と教会（純儀礼的面を除いて）のすべての権力をあまねく要求する一方で教会が国事に参画する権利は一切拒絶するというものだった。彼は地上におけるいかなる裁きも自身の上には認めなかった。しかもツァーリ権力のこうした本質を、善への奉仕ではないにしても悪の克服によって正当

化しようとしたのである。こうした思想は伝統的なロシアービザンツの正教的土壌に根付くものだったが、雷帝はそれらの思想を不条理なまでに押し進めたのだった。治世の初期には雷帝は英雄だったが、後期には暴君であったと歴史家カラムジン〔一七六六～一八二六年〕が書いたのは偶然ではなかった。

ロシアの神権思想の歪曲に反対したのが聖フィリップだった。彼はロシア教会の最良の伝統を体現していた。この聖者はツァーリの神権政権を制限しようとまではしなかったが、ツァーリは**「聖なる法典以上のものではない」**し、**「やんごとなき法の決まりに従う」**ものと確信していた。フィリップによると**「国家においても教会と同様に、同じキリストの義が実現されるべきであり、それを保護するものとして主教たる自分が置かれている以上、本当のことを黙っているわけにはいかない」**のだと。フィリップの立場はロシア正教会の伝統、つまり教会事業においても、国事においてもツァーリ権力と教会権力は合一すべきだという府主教マカーリイの「権力のシンフォニー」という理念に立脚していた。

正教の観点からすれば、教会が俗事に参加することは至極当然である。なぜなら世界はキリストの真実の支配下にあり、ツァーリと言えども**「聖なる法典とやんごとなき法」**に従って行動すべきである。教会の司祭の義務とは、正教国家への奉仕の正しき道を指し示すことである。

しかしながらイワン雷帝は専制政治はそれ自体**「神によって戴冠されしツァーリ」**に発するものなので、臣民にとっては大いなる恵だと確信していた。それゆえ専制の制約と捉えられかねないあらゆる発言、あるいはツァーリの何らかの行為の非難と受け取られかねない行為はこの上ない厳罰に処すべき裏切りと考えられたのだった。かれは身分の別なくすべての臣民を自らのしもべと考えていた。と同時に彼は勤続態度よりも家柄を重視したのだった。こうしてロシアの王位に暴君が着くことになったのである。

フェドトフは聖ヨシフ・ヴォロツキイ〔一四三九～一五一五年〕をモスクワ専制国家の徹底した擁護者としたが、同時にこう強調した。神の似姿としてのツァーリについて語りながら、その一方でそのような高位はキリストの御業に奉仕する事へのツァーリのそれにおとらず高い責任を重視させるものだと。ツァーリの神のごとき権力の教えの著者であるヨシフは**「ツァーリ暴君説」「合法的な暴君性」**なるものを創りあげるのだった。道徳的犯罪に対してツァーリは罰を受けねばならないし、彼の道徳的暴虐にも限度がなくてはならないとされた。府主教フィリップは彼にとって悲劇となったイワン雷帝との確執のなかで正教の理想を擁護したのだった。フェドトフは書く。**「彼が死んだのは死にかけていた習俗のためではなく、ロシアの神権性的権力全体が保持していたキリスト的真実という生ける理念のためだったと。イワンの王権はこの理念を荒々しく踏みにじりながら、それを捨てることもできず、さりとて退位することもしなかった。聖フィリップが生きたこの一世紀は絶えずこの理念を揺さぶり、既定の世俗と教会の『シンフォニー』という理想からますます離れていった。神事を欠いた正教王国は魂が飛び去ってしまった死体であった。」**

目に見える教会の長は総主教であり、ご自身は目に見えぬ教会の長たるキリストの姿なのだ。ここからツァーリと比べた総主教のカリスマ的優位性も出てくる。ツァーリ権力が強化されるにしたがって、この霊的な要素が混入してくる。聖塗油がツァーリに神の似姿を付与する。ツァーリは教会のヒエラルキーには加わらないが国家並びに教会における思考の統率権を実現する力と叡知を授かるのだ。こうしてツァーリの特別

のカリスマ性が形成された。権力は聖なる儀式を受け、神秘的な色彩にいろどられ、そのことが専制君主のもとへの権力集中という課題にも適合したのであった。

正教の僧侶階級の中からロシア国家の本質を論じる最初の「**理論家**」が輩出する。**「彼らは正教の観点に立って、若干のビザンチン的概念に従い、とりわけワシレウス**〔ギリシア語の君主の称号〕**、つまり正教でいう神の代理人と、キリストの名において神の導きのもと支配する専制君主という概念に従って、国家の原理を形成したのだった。」**宗教理念は進化し、次第に世俗的な国家思想と近づいていった。ステファン・ヤヴォルスキー〔ロシア正教の司教、一六五八～一七二二年〕の論説では自然法にもとづく明確な国家原理が解釈されていた。実定法体系は多くの場合、ロシアとプロテスタント世界との関連のおかげでロシアに浸透していった。一八世紀の学説にとって特徴的なのは、正教と功利主義思想との混合であった。しかも宗教的身分その他の利害と切り離された国家利害の学説が形成されていった。

ニコン総主教〔一六〇五～一六八一年〕は形成途上のツァーリと教会の関係に修正を加えようとした。彼の解釈する**「権力のシンフォニー」**思想は宗教的手段で、教会が国家に影響を与え、国家には教会の規範を破らず、みずからの法律を正教の原理によって神聖なものとすることが義務付けられていた。ニコンはこう想定した。教会の全権（その扶養も含めて）は国家権力よりも高く、教会は国家原理よりもはるかに不可侵のものだった。総主教はツァーリの精神的**「守護者」**としてふるまったのである。一六五六～一六五八年、のニコンとツァーリの確執は教会と国家の相関関係の本質の理解の違いという土壌で起こったものである。アレクセイ・ミハイロビチ帝〔一六二九～一六七六年〕が俗事にかかわる司祭階級の裁判（総主教を例外として）を官僚によって行う権利、教会の人事を指名し、自分のさじ加減で教会の人事を差配する権利をわがものとすることで教会実務を指導することを要求したのだった。逆にニコンは教会の仕事はツァーリ権力を聖化する司祭階級に属するものと確信していた。規範によると司祭階級は世俗裁判ではなく教会裁判にかけられるべきものとされていた。ツァーリは教会内部の事象に介入することはできないし、彼の気の向くままに教会の職務を下賜することはできなかった。ニコンは考える。ツァーリと総主教は神から権力を与えられている以上、どちらが上位というものではないと。教会権力は皇帝権力よりも高いがそれは教会内に限ると。俗事の長はツァーリである。国家と教会の大論争の末、国家が勝利する。ある見方をすると総主教に対するツァーリの勝利は、宗教的理想に対する世俗的理想、キリスト教的目標に対する世俗的目標、聖性に対する国家的威光の勝利ととらえることができる。ニコンのふるまいには権力に対する侵犯が露見し彼は、流刑に処せられた。一六五八～一六六七年には総主教不在のまま、その役割は事実上アレクセイ・ミハイロビチ帝のものとなり、直接的には大貴族のストレシネフ〔一六六六年没〕つまり来るべきピョートル一世〔大帝、一六七二～一七二五年〕時代の宗務院長の原像となる人物が**「教会の監督をした」**のであった。

教会が国家に従属し、国家的ヒエラルキーの一構成部分となる段階が始まった。総主教が**「皇帝」**の教師となることはできなかったのだ。いかに逆説的とはいえ、このことがアレクセイ・ミハイロビチ帝の時代に起こったことだ。彼こそは**「おそらく聖なる王冠をかぶるに値する唯一の人物だったのだから。穏やかで，敬虔そのもの、ほとんど聖者といっていい彼は、信仰の力、子供のごとき心根の純粋さ、真実の渇望でわれわれを驚かす人物だったのだから。それがどうだろう。歴史は彼の聖なる望みを**

いかに嘲笑ったことか！」ラスコール〔一六六七年に古儀式派が正教会から破門される〕がルーシを震撼させる。その背後には巨人のような皇帝の姿が立ちはだかったのだ。彼は神聖なる王国がよって立つすべての制度を転覆させてしまう。「最後のモスクワ総主教〔アドリアン、一六三八～一七〇〇年〕は新たな恐るべき皇帝の前に、聖母のイコンを抱えた無言の代理人として、まさに〔一六九八年に反乱に失敗した〕銃兵隊の死刑の朝に立たされたのだった。」

ピョートルの改革とともに、ツァーリ権力に対する伝統的なロシア的関係が崩れた。「神聖なるツァーリの奉仕」はますます「国家への奉仕」と解釈されていく。伝統的な『正教王国』という理念とは本質的に異なる貴族帝国の理念が形成されていくのである。しかしながら「民衆はツァーリに宗教的に接した。」とフェドトフは書く。「民衆にとってツァーリは生身の人間とか、政治理念といったものではなかった。彼は神によって塗油されたものであり、地上の神、神の力、と真実〔プラウダ〕の体現者であった。彼との関係においては自分たちの権利だとか、自分たちの名誉といったことは問題にもならなかった。神としてのツァーリを前にしては卑下などなかった。」これに対し貴族階級は早くも「身分別組合の形を取ったとはいえ、個人の名誉、個人の忠誠といった」西欧的原理を受容し始めていた。しかしながら以前同様民族を束ねていたのは、「ある人にとっては宗教的、またある人にとっては民族的というツァーリ像であった。」権力はこれとは違った自己解釈をした。権力は自らの主権を主張し、そこにおいて人間個人が道徳的資質という観点からではなく、「政治的、技術的課題や目標にとって」の有用性という観点から評価され始めたのである。国家は官憲的に形式的で無関心なものに変質した。こうした評価はスラブ主義的伝統を持つものだ。

情熱的かつ決然たるコンスタンチン・アクサーコフ〔一八一七～一八六〇年〕はピョートルの改革を次のように評価した。「ピョートルの改革の本質は次の通り。大地に根差した国家の類型は警察的類型にとってかわられた。そこにおいて国家は民衆原理から引きはがされ、ロシア人の精神とは疎遠なこの新たな理想を実現するために、ナロードの内面的、伝統的、道徳的生活の自由が侵害されてしまったのである。……古代からの専制は（偶然によるとはいえ）事実上、いや原理的に専横へと変質してしまったのである。……」

スラブ派の見解によれば、ピョートル一世の時代に、国家と民衆の土地との決裂が起こった。彼らは次のことを証明しようとした。彼らと同時代のロシアは古代ルーシによって生み落とされた多くの貴重な社会慣習を失った。全体の利益のために共同体として自己否定するという原則にのっとった共同生活の形態である。共同体つまり土地（ゼムリャー）が国家を生むのであって、国家が土地を生むのではないのだ。

ピョートルの改革はここでアクセントをはっきり変えてしまった。「正教にもとづく国家ではなく、」世俗的な国家が支配することになり、国家の力が絶対者にまで高められてしまったのだった。

ピョートル一世はツァーリの職務を神の御業とは無関係なものとして捉えた最初のツァーリであった。「国家イデオロギーのこうした新しい表現の中にこそ、ピョートル前のロシアとピョートル後のロシアの歴史的断絶のラインがくっきりとあぶりだされるのだった。」新たな「国家意識」は民衆レベルの伝統的な国家「意識」になじまないどころか、全くそぐわないものとさえ言えるのである。そしてこのことがフロロフスキー〔一八九三～一九七九年〕の言葉を借りれば、「ロシアの精神世界の分極化」へ

と不可避的に導いたのだった。

ロシアの近代前期には自然法は二つの異なる教義の形でひろまった。**「ピョートル大帝と彼の腹心の部下であったフェオファン・プロコポーヴィチ**〔一六八一～一七三六年〕**は皇帝の専制権力に容易に適用できるホッブス**〔一五八八～一六七九年〕**の理論をとりわけ高く評価した。これに対しゴリーツイン公爵**〔一六六五～一七三七年〕**とタチーシェフ**〔一六八六～一七五〇年〕**はグロチウス**〔一五八三～一六四五年〕**とその派の人たちの理論を選んだ。**」プロコポービチとタチーシェフはともに国家の法的理念をよく理解し、国家に内在的な契約として、皇帝と臣民の関係を理解していた。その後形成されつつあったロシア社会に対する啓蒙絶対主義のリベラルな態度の萌芽が出現し始めるのである。

戴冠式の教会儀式は修正されざるをえなかった。それまでは即位するものに対して府主教や総主教が王冠をかぶせていたが、今ツァーリ自らがこれを執り行うのだった。かくてピョートル一世の妃エカテリーナ一世〔一六八四～一七二七年〕の戴冠式〔一七二四年〕の際にも同様のことが起こった。聖なる儀式が絶頂に達した時、皇帝のマントと王冠がピョートル一世のもとに届げられ、大帝はそれを王妃にかぶせると、聖塗油を執り行うためにモスクワのクレムリンの由緒あるウスペンスキー大聖堂の王門へと彼自らみちびいたのだった。

ウスペンスキー大聖堂で一七六二年九月二二日、エカテリーナ二世〔一七二九～一七九六年〕も同じ儀式で戴冠したのだった。半円形に居並んだ五五名の高僧を前にして、来るべき女帝はテンのマントを肩から脱ぎ捨て、紫の王衣をまとったのである。そのあと金糸の刺繍が施された枕から王冠を取り上げると、彼女は自らの手でみずからに王冠をかぶせ、右手に錫杖、左手には王標を持ち、その姿で、全国民の前にロシアの象徴として立ち現れるのだった。こうした新機軸はロシア史上かつてなかったことであり、神の御蔵としての玉座という民の理解に大きな傷をあたえたのだった。新たな象徴はそれなりの根拠を見出そうとした。後の法学者たちはこう書くことになろう。錫杖と王標を取り、手ずから王冠を自分にかぶせることで、皇帝は**「万民の前で自身の専制を称することになった。」**と。正教のツァーリの地位を占めたのは**「現人神である」**ことをやめたロシア皇帝であった。権力の領域で、世俗と教会の間にはっきりとした境界線が引かれたのである。

ツアーリと教会の関係は根本的に異質なものとなっていく。著名なスラブ主義者のサマーリン〔一八一九～一八七六年〕はこう考えた。**「ピョートル大帝は宗教を道徳的観点からのみ理解した。それも国家にとって必要であるかぎりにおいて。そしてここにこそ大帝の特異性と彼のプロテスタント的一面性が如実に表れている。自己流の観点に立つ限り、彼には教会とは何かを理解できず、そもそも教会が見えていなかった。なぜなら教会の世界は実利の世界より高いものなのだから。それゆえ教会などないかのようにふるまい、犯罪的にというより、無知ゆえに教会を否定したのだった。」**国家の教会化のプロセスは終わる。教会の国家化が始まるのである。総主教制は廃止される。宗務院（シノード）が設立される。教会支配の新たな形態はロシア本来の教会意識と単に無縁なだけでなく、千年にわたる教会規範に真っ向から対立するものだった。イワン雷帝は自分の気に入らない府主教を更迭したに過ぎず、アレクセイ・ミハイロビチ帝は、教会を支配しようとしただけだったが、彼の息子のピョートルは教会の管理を自身の官吏の一人にまかせてしまったのだ。そればかりかピョートルは総主教制を廃止したうえで地上の神とみなされるようにとの要求

をつきつけたのだった。かくて彼によって建設された町は彼の存命中からすでに使徒ペテロの町ではなく、ピョートル一世の聖なる町と受け取られたのだった。ピョートル一世の改革は教会とその神秘的制度にとっては破壊的なものだった。教会は国家の厳しい監督下に置かれた。しかもほとんど二世紀間にわたる宗務院の歴史において聖職身分の者が唯の一回も長となることはなかった。宗務院長の選任はこの重大な地位に自分のお気に入りで忠実な人間をつけたいという皇帝の意向によってしばしば決められたのであった。

宗務院長になってからもゴリーツィン公爵〔一七七三～一八四四年〕は当初、やんわりといえば**「放埒な」**生活態度を続け、**「若気の至りで」**その手の女の家に出入りし、女たちも客人がまさか聖なる宗務院の院長ご自身であるとはつゆ思わなかったほどである。それどころか皇帝への報告を作成するにあたっても**「灯明の煤まみれの部屋」**とか**「どすぐらいリャサを着込んだ坊主ども」**などとちゃかすのだった。報告書の文体を修正するようにとのアレクサンドル一世からの反論が出されたほどだった。宗務の国家化はロシア正教会及び他の宗派にすさまじい損害を与えたのだった。

一八世紀全体を通じ、国家は単に教会を管理下に置き、教会を国家の一機関としようとしただけでなく、最大限弱体化しようとしたのだった。絶対君主制は教会のような権威ある勢力に肩を並べられることに耐えられなかったのだ。教会領の国有化はエカテリーナ二世の治下で完遂された。かのプーシキン〔一七九九～一八三七年〕ですらこう書いた。**「エカテリーナは僧侶階級を公然と迫害し、彼らを自身の絶対的な権力欲の犠牲とし、時代精神に合わせたのだった。」**

ピョートル一世は全包括的な最高権力の新たな原則を確立した。但しここでは次のことを特記する必要がある。ピョートルは専制君主の絶対権力を強化するにあたって、個人的虚栄心ではなくロシアの隆盛を図ることを指針としたのである。クリュチェフスキー〔一八四一～一九一一年〕はこう書く。**「ピョートル一世は自身の権力を無制限な権力としてではなく、祖国の富、すなわち『生みの大地、ロシアの民あるいは国家の富』として理解した。その概念こそピョートルが我が国でほとんど初めて習得し、社会秩序の簡にして要をえた根幹を余すところなく表現したのだった。専制、それはこれらの目的を果たすための手段だったのである。」**

ピョートルの活動を評価する場合に、専制権力の強化という点では彼は究極の保守主義者だったと特記しなくてはならない。ピョートルは西欧型の改革者というよりむしろイワン雷帝の後継者であった。彼は個人のツァーリ権力を強化し、抑圧機関を徹底させ、国民を中世型の国家機関の**「歯車」**に見事にしたてあげたのだった。西欧社会で徐々に確立され、ヨーロッパ諸国の社会・経済的成功を助けた人権とか市民社会はピョートル一世にはとことん無縁であった。ピョートル一世はルーシの中央集権国家にすでにあったものと同一の傾向の論理的発展形とも言うべき農奴制的奴隷制の強靭な基礎を築いたのである。

ツァーリ権力の本質を理解する上で重大な地滑りがおこった。ピョートル一世の時代以降、支配層である貴族はますますツァーリを神の影をおびた人格としてではなく、必要とあらば追い出し、首を挿げ替えることのできる政治的人格として捉えるようになる。その好例がピョートル三世〔一七二八～一七六二年〕とパーヴェル一世〔一七五四～一八〇一年〕であり、ずっと後になるとニコライ二世の家族全員を襲った悲劇であった。一八世紀を語る場合、ロシアの専制は議会ではなく、皇帝暗殺によって制限されたと言われるのもむべなるかなだ。

一九世紀になると専制概念の伝統的原理はカラムジン、ウヴァーロフ〔一七八六～一八五五年〕、府主教フィラレート〔一七八三～一八六七年〕、オプチナ修道院の長老たち、スラブ主義者、ドストフスキー〔一八二一～一八八一年〕その他の人々によって論じられた。とはいえ主調音は彼らではなく、**「ロシア版のヨーロッパ人」**によって奏でられた。彼らの影響をうけてアルカイックな時代遅れの残滓としての専制という社会意識が形成されたのである。ロシアの現実の**「悪と闇」**はすべて進歩的知識人はもっぱら専制のせいにし、そうすることで国内の事態に対する自らの責任を回避したのであった。君主制的保守主義はほとんど何の影響力も持たなかった。専制のイデオローグたちは巨悪の根源と受け止められた。君主制理念はもはやすたれた、ロシア社会の教養部分はそう受け止め、かくて一九一七年の二月にやすやすと君主制と訣別してしまったのだ。

フェドトフは専制が破滅的な結末を回避する可能性について考察する。専制側はアレクサンドル一世〔一七七七～一八二五年〕の統治下〔一八〇一～一八二五年〕でロシアを刷新するチャンスを利用することができなかった。それどころかすでに収束していたとは言え相次ぐヨーロッパの革命の亡霊におびえた専制政府は保守政治へと舵を切り、農奴制的ロシアを封印したのだった。**「ピョートルの革命の命脈尽きミイラ化された形骸が保守的教義へとまつりあげられたのだった。ここにこそ正真正銘の土壌喪失というロシア保守主義の永遠の弱点がある。・・・」**これはかなりオリジナルな思想だといっていい。フェドトフの見解では、ロシア版の保守主義とは**「民族的な生命体の保持と再生という目的を追求するのではなく、始原への回帰、いやそんなことは不可能なのだが、かといってピョートル時代の西欧主義のみずみずしい水脈による浄化でもなく、それこそ逆に事実上老いさらばえ、生きながらに腐敗が始まっている肉体を保持しようとしたのだった。権力の課題は・・・ロシアを冷凍保存、つまり生きながらに腐敗する肉体をできる限り伸ばし解体と死滅の不可避的なプロセスを引き延ばすことだった。」**言い方は大げさだが、本質はたがえていない。ツァーリズムは国家の切迫した要請にもぞもぞと反応し、感極まった状況が来て初めて改革へと乗り出したのである。

デカブリストの乱〔一八二五年〕があって初めて専制政府は**「スペランスキー**〔一七七二～一八三九年〕**のもとで新しい勢力となる」**官僚層の助けを借りてロシアを管理するのである。皇帝ニコライ一世は専制権力の全能性を固く信じ彼の国政における指針は官僚主義的中央集権制、権力のすべての梃を君主の手中に集めることだった。彼はピョートルの伝統を襲った。ほとんど権力機構の中枢ともいうべきは皇帝直属官房だった。それは君主と政府機関を結びつけ、国政支配に彼の積極的な個人的な参画を保証する機関となったのだった。ニコライ一世は反動主義者という人口に膾炙した性格にもかかわらず、農民層の状況を軽減することを心から願っていたのである。国有地農民の支配を改革する実行委員の長であったパーヴェル・キセリョーフ〔一七八八～一八七二年〕に向かって皇帝は農奴制について愚痴をこぼしたものだった。**「農奴制にわしは三度も手を付けた。だが三度ともあきらめざるを得なかった。明らかにそれが神のご意思だったのだ。」**しかしながら彼は三〇年も農奴制に**「秘密戦争」**を挑み農奴制の廃止が不可避であることを**「心理的に」**貴族にうえつけたのだった。そればかりかこれらの問題を審議する秘密委員会で後の改革派のメンバーが準備され、改革へ向けての基本路線が決定されたのである。

ニコライ一世のもとで立法の根本的かつ大規模な法典化作業がおこなわれ、その結果ロシア帝国法典集が編纂されることになった（『ロシア帝国法律大全』全四五巻（一八三〇年）と『ロシア帝国法典』全一五巻（一八三五年）のこと）。どんな法律も君主の署名を経て効力を発揮するものとされた。しかしながら法典集はここでは君主の意志を制限するものとなる。ツァーリのすべての指令、処置というものがそれに従うべきものとされたからである。ツァーリの情感は法的規制によって抑制されるのがのぞましいものとされ、かくて専制君主とは伝統でそう考えられただけのものとなった。法律整備のプロセスが形成され、何十人もの官僚がそこに参加したのである。

ニコライ一世はただ統治するだけにとどまらず「ロシアを維持しよう」と努めた。「くれぐれも万事を維持せよ」、と死にゆく皇帝は帝位移譲の際に息子のアレクサンドル二世（一八一八～一八八一年）に伝えたのだった。

解放皇帝（アレクサンドル二世）はすぐれた改革者としてロシア史に名をとどめている。しかしフェドトフは彼の統治時代を肯定的というよりむしろ否定的に評価する。「アレクサンドル二世の諸改革は官僚制度に亀裂を生み、かといって新たな原則の下で国家を再建することもなかったので、人知の中に混沌と不調和を残し、政府というメカニズムのすべてのネジに軋轢を残してしまったのである。」「右手で創ったものを、左手で壊すことによってツァーリはロシアを不均衡なものにしてしまったのであった。」とフェドトフは結論した。この評価は極めて峻厳で、多くの点で主観的なものだった。

とはいえ一九世紀六〇～七〇年代の諸改革は、とりわけ同時代人からは一義的な評価を受けたわけではない。ロシア社会の急進左派にしてみればそれは農民にとって不十分かつ強奪的なものにおもえた。保守主義者は諸改革は国家制度にとって破壊的なものとみなした。リベラル派でさへアレクサンドル二世の活動に対しては懐疑的に接した。著名な社会活動家にして偉大な国家学派の歴史家チチェーリン教授（一八二八～一九〇四年）は書く。「この心優しき君主にしてロシアの大地に自由の種をまいたお方が、自分の後継者に残した遺産を見るにつけ、困惑せざるを得ない。完全なる改革はロシアの現実を新たな高みへと高め、余りにも長きにわたり拘束されてきた民衆の精神に翼を与えるものでなくてはならなかった。ところが現実に起こったのはその逆であった。至るところ不満、何処に行っても不安、当惑だらけだった。・・・ロシアが見せていたのはある種のカオスであり、そのただ中で一人果敢さを示したのは破壊分子だけだった。」

アレクサンドル二世の諸改革を、それらが真に国民のための生活へと舵を切らなかったがゆえにフェドトフは受け入れない。西欧諸国の経験を国内に普及しようというお決まりの試みとしての改革のリベラルな性格が彼の拒否反応を招いた。ゲオルギー・ペトロービチ（・フェドトフ）はこう考えた。アレクサンドル二世の政府は時がくれば最高権力のパートナーとなることができる政治勢力、社会勢力の形成という課題をこなすことができなかったのであると。国家建設は下からの自発的活動、イニシアチブと上からの支配との結合をあくまでも排除するという路線でおこなわれたのだった。リベラルな改革は農村の疲弊化と、産業における破滅的危機へと導き、外国資本への従属が強まったのである。専制政府は社会を結束させ得るような新たな思想を提起できなかったのだ。

政治的テロが現実のものとなる。テロリストたちは改革を撃破することはできなかったが、革命派の高まる攻撃性がロシア社会の教養層に対

する政府部内での猜疑心と不信感の種をまき、そこから**「一揆主義者」**や**「爆弾を持ったニヒリスト」**が出現し、急進的なインテリゲンチアを保守派に対するさらに断固たる行動へと突き進ませたのだった。ロシア社会では分裂が拡大した。数百年かけて形成されたロシアの生活の根幹が疑われたのである。急進主義が文字通りロシア社会の教養層を育て、それとともに進歩的な変革という健全な思想よりも魅力的ながら現実から遊離した、本質においてユートピア的な社会のある状態から別の状態への急速かつ断固たる移行という理論への熱中が幅を利かしたのだった。

国家側は社会のポジティブな勢力を生活刷新から排除し、とりわけゼムストヴォ（一八六四年から設置された県・郡の地方自治機関）運動を**「ごく制約された御料地」**に追い込み、ゼムシチナからあたかも**「裏返されたオプリチニナ」**を創出したのだった。地方の隔離はゼムストヴォ議員たちの活動範囲を郡部に限り、国全体の課題の解決から彼らを排除してしまったのである。改革者たちの社会的主柱は官僚だけのものとなった。彼らは貴族にも、企業家にも、はたまた農民からも支持を取り付けられなかった。第一に**「正教徒たるツァーリという古き伝統の復活」**をもしようとせず、第二に、これが重要なのだが、ロシアを貴族のものから農民と商人の国へと立て直しすることもなく、自己閉塞していったのである。フェドトフによればこのためには自分自身の誠、自分の国民に対する信仰が、また決然性と勇気が求められたが、これこそアレクサンドル二世とその政府に欠けていた資質なのだった。彼らは民族的流れとは無縁であり、ロシアを連綿と続く新たな諸矛盾へと引きずりこんでしまったのだった。

■訳者・注

「イワン四世（雷帝）は困難なリヴォニア戦争、側近との衝突、大貴族への懲罰と彼らの反発に直面して、一五六五年退位をもって国民を脅迫し、非常大権を得たうえで、特別の領域、軍隊、財政、行政を持つオプリチニナを創設した。この直轄領は公国の用地の半ばを占め、主に士族よりなる独自の部隊オプリチニクを持った。直轄領以外の地域はゼムシチナと呼ばれ、貴族会議がこの領域を支配したが、重要問題についてはイワンの同意を必要とした。」（『ロシアを知る事典』平凡社、一九八九年八月二五日、初版第一刷発行、「オプリチニナ」の項、参照）。

帝国の最後にして壊滅的な時代が始まりつつある。フェドトフは書く。**「解放皇帝という民衆の伝説にはおよそぐわない宮廷の重苦しい道徳的空気は国民の心の中に宿る君主制への期待度が内的に崩壊していたことを立証しているのだ！」**後に**「国民の心の空洞」**は（君主制とは）まったく別の革命への待望によって埋め合わされるのである。前途に専制を待ち受けていたのは革命的暴発を抑える可能性を利用しなかったことに対する手ひどい報復だった。

とはいえアレクサンドル二世は**「諸悪の根源」**である農奴制の廃止に向けて多くのことを成し遂げた。この点においてこそ彼は誠の解放皇帝だった。どんなに優柔不断な性格だったにせよ、彼はその意義からいって並ぶもののない事業をなしとげたのだった。つまり農奴制的従属から幾百万もの人々を解放し、今こそ新たな資本主義的ロシアのための空間を開いたのである。成否は後継者、つまり彼らの国事力、国家的意志、目的志向性にかかっていた。改革とは万民の幸福によって必ず完遂されねばならないといういささかナイーブで本質的に誤った概念が我が国で

は形成されていた。改革完遂という問題は、歴史プロセスがそうでない限り成り立たないものだ。改革とは往々にして歴史の舞台を終わらせるのではなく、その新たな段階を開くものであり、それは同時に新たな問題、課題、目的をもたらすものなのだ。始まったものは継続を要求する。その逆の場合には破綻がやってくる。アレクサンドル二世に決断力が不足していたとしたら、彼の世継ぎがそれを発揮すべきだったのだ。しかしながら一八八〇年代に入るころ帝国の建設的な資源は尽きようとしていた。

一八八一年、人民の意志派によるアレクサンドル二世の暗殺ののち、アレクサンドル三世〔一八四五～一八九四年〕がロシア皇帝に即位した。彼の治世は反改革としばしば結び付けられる。ロリス＝メリコフの憲法草案を退けたことをもって彼の罪とするのが歴史家の定説である。この提案で、国事問題解決にゼムストヴォや都市住民を参加させること、農民の移動の軽減、企業家と労働者の関係調整その他もろもろの案が盛り込まれていた。ロリス＝メリコフ〔一八二五～一八八八年〕の案をアレクサンドル三世は**「犯罪的一歩」**と呼んだ。かくしてロシアの現実は二〇世紀に向かって伝統的な専制路線を転げ落ちていったのだった。しかしながら、それとは真っ向から対立するもう一つの視点があった。アレクサンドル三世がロリス＝メリコフの憲法草案を受け入れたとしたら、専制の崩壊は一九一七年ではなく、ずっと以前に訪れたであろうというのだ。第一次ロシア革命によってツァーリから**「もぎ取られた」**憲法が何をもたらしたかを想起するだけで、そのような結論が根拠あることは認めねばなるまい。

とまれかくまれ、ツァーリとその同調者たち、なかんずく宗務院長のポベドノスツェフ〔一八二七～一九〇七年〕と雑誌**『ロシア通報』**の編集長兼発行人カトコフ〔一八一八～一八八七年〕は、アレクサンドル二世の個々の改革が真逆の結果をもたらしたとはいえ、一八六〇～七〇年代に課された国の発展方向を変更することはかなわなかったことを理解していた。ニヒリストや革命家に宣戦を布告するだけの保守派なら事欠かなかったが、いざロシアの前途に開かれた可能性の最大限の利用のための実務的かつ日常の作業となると、彼らには手に負えなかったのである。加速化された経済発展を奨励し、この点では少なからぬ成果を上げたとはいえ、国民優先の政策となるとその復活にはきわめて臆病であった。**「赤紫のふさふさの王衣の下で、ロシアの腐敗は、最後の皇帝の時代を迎えるころには、平和的手段による危機からの脱出への希望はほぼ無きに等しい程度に進んでいたのだった。」**とフェドトフは書く。**「大事なことは道徳的資源の枯渇であった。スラブ派的理想は、警察機構による偽民族主義的圧殺によって汚されてしまったのである。・・・神権主義的王国思想の復興が不可能なものになってしまったことは明白だった。」**

ロシアにはさらに二つの最後のチャンスが与えられていたとフェドトフは考えた。一つは一九〇五年革命で、二つ目はストルイピン〔一八六二～一九一一年〕の反革命であった。一九〇五年には民主主義の穏健派が勝利することもあり得た。しかしそれは実現しなかった。主導権が政府の手中に握られており、政府はフェドトフが考えた通り、民族的な伝統を復興し、この土台の上に社会の健全なる勢力を結集する可能性があった。**「皇帝ニコライ二世は自身の玉座のもとにロシア的な尺度でいうと二人のたぐいまれな国家活動家を配するというまれにみる幸運を持っていた。ウィッテ**〔一八四九～一九一五年〕**とストルイピンである。彼は一方を憎み、双方を裏切った。……しかしながら二人とも王国にその進むべき道をしめしたのだった。一方は企業家階級の力を結集して国の経済的再生を図る道**

であり、もう一方は憲政国家的形態でロシアの政治的復興を図るというものであった。ニコライ二世はウィッテを狡猾な財政家のレベルまで、ストルイピンを警察長官に貶めようとしたのだった。

鉄道建設の成功は無条件にウィッテの功績と言える。彼のもとで鉄道の総延長は七〇パーセントも増大した。彼の主導で一八九一年にシベリア鉄道の建設が開始され、五年後には東支鉄道建設の契約が中国との間に結ばれたのである。

ウィッテによって実行された最大の改革は一八九七年のルーブルの金本位制への移行であった。今や紙幣はロシア帝国の保有する金によって保障され、国内の通貨流通のみならず、外国資本のロシアへの流入を促進したのである。ウィッテは酒の国家専売制を導入する。彼はまた権力や共同体の庇護からの農民の解放とすべての市民的権利を農民に分与することを主張する農民問題のラジカルな解決策の支持者であった。

ウィッテは専制の確固たる支持者だったが、**「君主制の社会化」**の必要性を唱え、その主たる使命は、大衆―それも職能的、身分的ではなく、文字通り**「全大衆の利害を守ること」**だと見たのだった。**「とどのつまりロシアは事実上の立憲国家となり、他の文明諸国と同様、そこでは市民的自由の基盤が定着していこう。……問題はそれが平和裏に理性的に行われるか、それとも流血の結果となるかの違いだけだった。」**

一九〇五年一〇月にはウィッテは普通選挙法を実現するための条件を創出し、労働日の設定や労働者の保険（失業保険か？）の導入、農地銀行の活動拡大、ポーランドとフィンランドへの自治の供与等々といったことを、ツァーリに提言していた。これらの提言の一部は一九〇五年一〇月の有名なマニフェストで実現されたのだった。これと関連した諸改革をざっくり評価するとき、彼が帝位を保持するうえでニコライ二世を助けたといえそうである。君主主義者にしてツァーリ政府の重鎮としてのウィッテの功績はここにあった。これに対する皇帝の**「感謝」**のしるしとしてすぐさま出されたのがウィッテの首相のポストからの解任だった。さしずめこの解任劇は互いの個人的不和によるものとみなしてよさそうだ。著名な歴史家のタルレ〔一八七四～一九五五年〕は両者の関係をこう描き出す。**「ウィッテにしてみればニコライに対する不信と軽蔑があり、ニコライにするとウィッテに対する不信と憎悪があった」**と。ウィッテはツァーリが当初から失政に対する責任を回避し、明らかに無実の人々に責任を押し付けようとしたとしてツァーリを非難した。とはいうもののこうした特質は一人ニコライのみならず、多かれ少なかれ、現代も含めすべての政治家に当てはまることだ。問題は何処までやるかというレベルの問題、他人に**「すり替える」**技量にかかっていた。ニコライ二世の場合、そのレベルは低かったと言えよう。ツァーリはその取り巻きの中でほとんど唯一といっていいヨーロッパ型の老練な政治家、互いに利害を異にする勢力の間を巧みにすり抜けることのできた人物を失寵の対象にしたことだった。

内務大臣、続いて総理大臣としてのストルイピンの活動の意義はかれこそは改革者で最初にロシア国家の威光は、その主たる住人である大ロシアの共同体農民の福祉と正比例の関係にあると喝破したことである。農民の経済状態の改善をのっぴきならない国家的課題とストルイピンは考えた。この課題は現代の史学でまま主張されるような政治的性格ではなく、社会経済的性格のものだったのである。

農民層の統一の具体化は共同体というよりも独自の共同社会ともいうべき農民世界、ムラなのだ。このために政権の主たる課題は共同体の廃止というよりもその改革、強固な農民経営の創出だとストルイピンは考

えた。ストルィピン改革の主要な要素は封建的な遺制である農地の断絶、狭い農地、遠距離農地を排した新たな土地制度であった。未完であったとはいえ、ストルィピンの改革はこんな印象を与える。一九〇五～一九一五年の間に、農地整理協会は大英帝国の領土に匹敵する二〇三〇万デシャチーナ〔一デシャチーナは一・〇九ヘクタール〕の土地の整理を行った。一九一一年のストルィピンの暗殺とそれにつづく第一次世界大戦が改革派の活動を中絶させたのだった。

しかしながら多くは皇帝の人格にもかかっていた。フェドトフはニコライ二世を否定的に評価する。一見心からの神への信仰とロシアに対するツァーリの奉仕の義務は至高の神によって彼にゆだねられたと堅く信じるニコライ二世はゲオルギー・ペトロービチ〔・フェドトフ〕の共感を得るはずだった。なぜならフェドトフはツァーリの宗教性、権力に対する宗教的関係にこそロシアの君主制的伝統の復活の条件を見ていたのだから。ニコライ二世は生涯専制の護持者であった。なぜならそれは至高の神によってもたらされたものだと考えていたからだ。しかしながら確かに第一次ロシア革命の影響のもととは言えロシアにおける立憲国家の建設と専制権力の制限に乗り出したのはほかでもない彼だった。ロシアには市民的自由が導入され、立憲機関である国家ドゥーマ（下院）が設置されたのだった。一九〇五年一〇月一七日のマニフェストの直後ニコライ二世は母后〔マリヤ・フョードロヴナ、一八四七～一九二八年〕に向けてこう書いた。自分はこの決定を**「十分意識的に受け入れ、これからも廃止するつもりはありません。」**と。ツァーリは約束を守り抜いた。国会はロシア君主制の一部となったのである。

しかしながらすぐれた歴史家のソロヴィヨフ〔一八二〇～一八七九年〕は正しくもこう書いている。**「政府形態の変更は争乱という形で政府から人民によってもぎ取られてはならない。」**改革とは反対派への譲歩という性格を持つべきではない。そうした改革は醜悪な性格のものとなってしまう。国会の動きにはやがてきわめて根源的な欠陥が露呈してくる。大多数の議員が知識、それもこれが重要なのだが、国事を解決する経験を持ち合わせていなかったのだ。その点比較的穏健な議員であったツァーリ側近の閣僚たちは高度なプロ意識と周到性で際立っていた。しかし国会の多数派は閣僚たちの確かな論拠を退け、上っ面な知識、自信過剰、近視眼性を発揮してしまったのである。実際には改革派の敵は保守系の原理主義派ではなく、オクチャブリスト〔一〇月一七日同盟〕、カデット〔立憲民主党〕よりも**「左側」**に位置する無神論的急進派であった。とはいえ国会は全体としてニコライ二世とその政府の改革努力に反対したのだった。カデット党のリーダーのひとりであるマクラコーフ〔一八六九～一九五七年〕の告白はその典型だった。**「だが第一次ドゥーマ時代にカデット党に代表されるリベラルな世論は何を示していたか？この派にできたことは妨害すること、だけだった。つまり革命派、改革派を問わずその事業を妨害することだけだったのだ。……また自陣営からは国家的人物を輩出しなかった。その理由は創造力を発揮できたのは目の前の権力との共闘だけだったが、カデット党はそれを欲しなかった。なぜなら目の前の権力と協力する限りでは創造力を発揮できそうに見えたが、カデット党はそれを望まず、権力は「倒され」、「立ち上がることはできない」と軽薄にも想像し、「革命派」は自分たちに従うことになろうから、結局自分たちはすべてを一人でやり遂げる。」**と。かくて現実はこうした子供じみた衒いの脇を素通りしていったのだった。

第一次国会においてカデット党は絶対多数を得たが、政府に対するさ

らなる圧力のためにこれを利用し、政府総辞職とか、非常大権とか議会政府といったますます新たな要求をつきつけるのだった。国会のリベラル派との交渉は袋小路に追い込まれた。ストルィピンもその一人だった。彼はミリュコーフ〔一八五九～一九四三年〕にこう説得したという。民選代議員は行政というものを全く知らず、権力機関を揺るがし、革命運動を処理できないだろうと。これにこたえてミリュコーフはこう言明した。**「必要とあらば、広場にギロチンを引き出し、国民の信頼に依拠する政府との闘争を繰り広げるすべての連中を情け容赦なく処罰するだろう。」**と。実際ミリュコーフはフランス革命の教訓を思い出し、高い理想の名において行われるボリシェビキの大量テロルを見越していた。ストルィピンは自分なりの結論を出す。**「こうした交渉からは何も出てこないだろう。しかしながらミリュコーフの最後の言葉には意味がある。ギロチンはともかくとして、非常手段を考えてもよかろう。」**と。それはほどなく現実のものとなった。**「ストルィピンの貨車」、「ストルィピンのネクタイ」**は長いこと一九〇五年革命にたいするツァーリズムの報復のシンボルとなった。こうした行動にツァーリを突き動かしたのは事実上国会における代替案の実現を潰してしまったリベラル派たちの立ち位置だった。**「リベラル派は急進派の立場に移行し、立憲機関における政治潮流としての完全なる無能力を露呈してしまったのだった。彼らが国会に見ていたのは暴露のための舞台であり、政府とツァーリを圧迫するための機関に過ぎなかった。彼らの行動には口にこそ出さないが、政府内での執行権力の奪取と、ツァーリ権力の制限のための闘争が透けて見えていた。」**こうしたことがツァーリや多くの顕官たちに代議制権力に対する不信感を招いたのだった。明敏な頭脳の持ち主だった大者の政治家ウィッテはこう指摘した。カデット派は**「国家的思慮分別」**というものをいささかも持たず、彼らは国政に対する何の準備もできていなかったと。政府と協力することを断固拒否したため、結局のところ両者の対立が不可避なものとなったのである。ツァーリは国会の解散を無制限に延期することはできなかった。なぜなら国会自体が革命的気運をロシア全体に広める中心となってしまったからである。

それゆえ**「君主制は社会主義者と共和主義者からなる国会を制御することはできなかった。」**とフェドトフが書くのは当たっている。**「それは歴然としていた。しかしオクチャブリストや民族主義者からなる国会を信頼することもやはりできなかった。」**と。ニコライ二世は反動的君主制に固執するあまり国会の指導者たちを権力側に参加させることもしなかった。それどころか彼は強調した。**「宮廷」**は反動思想のとりことなるあまり**「国内戦の本部」**となってしまったと。

こうしたフェドトフの主張はどう見ても論争の余地はありそうだ。国会には権力と共同するつもりはなかった。大多数の議員の目には権力の命脈は尽きていたのだから。議員たちは**「腐敗しきった体制」**を強化するのではなく、とことん破壊しようとしていた。政治的熱に浮かされるあまり、自分自身がこの腐った体制の一部であることを見ることができなかったのだ。事実彼らは反国家の立場に立つことによって現行の立法規範を拒絶してしまった。どの議員も委任状を受けとるにあたって皇帝への宣誓をするのだが、すぐさまそれを忘れてしまうのだった。皇帝と帝国の諸法規に対する厳かな宣誓は茶番となってしまい、それはほどなくして個人的なものも含め、悲劇に転じてしまうのだった（例えば一九一八年、議員のシンガリョーフ〔一八六九～一九一八年〕は大病室で赤衛軍兵士たちによって残忍な殺され方をしたのだった。）

ロシア議会制の開始は政権側の諸分派との共同ではなく、諸分派の激

しい抗争へと導いたのだった。議会の課題として真っ先に必要だったのは、国のために政治的諸勢力の利害を一致させることだったのに、ロシアの議会君主制はそれと真っ向から対立する結果をもたらしたのだった。政界での分裂はますます極端な形をとることになる。

専制にとって過酷な一九〇五年には、ニコライ二世の国政の最大の欠点が露呈した。皇帝の周りには専制に忠実な政治家たちの結束というものがなかった。ツァーリは母親に宛てこう書いている。自分には**「正直なトレーポフ**〔一八六二〜一九二八年〕**以外に頼るべき者が誰もいない。」**と。ツァーリはしかるべき結論を出せなかった。……一九一七年三月三日の夜、すでに退位した皇帝の日記にはこんなメモが残されている。**「何処を見回しても裏切り、小心、欺瞞だらけだ。」**辛い言葉ではあるが、ツァーリにできたことは自分を罰することだけだった。

皇帝一家の威信を傷つけたのはラスプーチン〔一八六九〜一九一六年〕だった。彼及び皇帝一家と彼の関係についてはジャーナリストたちによって、多くのほら話がでっちあげられ、露骨な誹謗中傷が書かれた。しかしながら宮廷特有の秘密主義は危険かつゆがんだ形を取るに至った。ロシアはラスプーチン主義の跋扈する歳月を恐れおののきながら送っていた。ツァーリの名において未曽有の教会冒涜がなされたのだった。**「宗教意識からするとこの罪一つとっても王朝に死を運命づけるものだった。」**とフェドトフは書く。**「文字の読めるロシア全体にとって、これは毎日つからねばならない汚らわしさの湯舟のようなものだったのである。……ロシア革命で致命的かつ決定的役割を果たしたのはたった二人の人物だった。この二人とはニコライ二世とレーニン**〔一八七〇〜一九二四年〕**である。前者は革命を野放しにし、後者は革命を自分の道へと方向づけたのだった。」**

ロシア正教会はニコライ二世を聖者に列した。生涯の悲劇的な歳月、時々刻々をロシアのツァーリは多くの点で〔一〇一五年に〕ロシアの諸侯間の敵対の犠牲となった最初の聖者ボリースとグレープの例にならった。自分を殺そうとした長兄スビャトポルク公〔九八〇頃〜一〇一九年〕の計画を知ったボリースは自身の強力な従士団を解散する。彼は流血の内乱を欲せず、自身の従士団、スビャトポルクの軍勢、さらにはキエフの住民たちの無辜の流血を拒否したのだった。スビャトポルクとは違って、彼はたとえ意図せずとも兄弟殺しにはなりたくなかったのだ。キリストの遺訓がボリースの心には生きていた。それらの遺訓は彼にとって神聖なものであり、かくてキリストにならって、キエフの権力を強奪したスビャトポルクの傭兵による死を進んでうけいれたのだった。死に臨んでボリースは彼を手討ちにしようとした兄のために祈ったという。諸侯間の内乱で殺されたボリースとグレープが列聖されたことには正教独特のキリスト教的受難の特殊な理解が表れていた。ニコライ二世には、迫りくる内戦への参加を拒否し、自身の運命と一家の運命を、神の聖油を塗られた皇帝の命と義務に対する真に正教的態度によって従順に待ち受けるという気持ちはなかったのだろうか？何しろ神はすべてお見通しなのだから……この問いに対しロシア正教会は肯定的に答えた。ロシア正教会はニコライ二世の人格を信仰あつきツァーリとみなし、ルーシではとりわけ尊崇されるべき聖者である受難者として彼を賞賛したのである。

フェドトフの下した評価については各人各様、賛否両論が出るだろう。専制崩壊の悲劇を深く体験し、文字通りロシア近現代史を悩みぬいた人間の感性がそこには息づいている。おそらく実現しなかった専制の**「好**

機」をめぐる考察は過度の主観主義と歴史的誇張のそしりを免れないだろう。しかしながら歴史的定義というものは往々にして仮定のものである。というのも歴史家が相手にするのは未完成の過程であり、それにつづく展開は、彼の過去に対する見解への修正を迫るのだから。フェドトフは驚くべき深さをもって、二〇世紀の歴史ではロシアの専制に残された場所はなかったことを示したのである。しかし権力側からのより効果的改革の動きがあれば流血は避けることが出来たとする彼の見解は、帝政ロシアの病理の診断にいやいや応じた人間のものとなろう。そこでも彼は精査された精密さでその診断を下したのではあるが。

フェドトフの定義によれば君主制的国家制度は**「精神と力の自殺的不和」**に耐えきれなかったのだ。諸大公までが、専制の崩壊を赤いリボンで迎えたのだった。

（第三章おわり）

補記　（「水源地」編集部による）

●原題　**Глава 3.** <Самоубийственный разлад духа и сил>

「第三章『精神と力の自滅的不和』」（原文ロシア語）。本テキストは以下のキセリョフの著作の中の『**霊感を受けたロシア**』の「**第三章**」に当たる。

●出典

Киселев А.Ф. - Увидеть Россию заново. (Многоликая Россия. – Одухотворенная Россия).

/Вступ. ст. Есина С./ М. Дрофа. 2010г.

A・Φ・キセリョフ『ロシア再見』（一巻の中に『多面的なロシア』、『霊感を受けたロシア』の二著作を収録）（序文エーシン）、モスクワ「ドロファー（野鴈）」社、五九二頁、二〇一〇年刊。

●訳文テキスト内にある〔　〕内の補記は編集部による。

●本書と著者キセリョフについては、「水源地」第三号所収の『哲学者の歌う心』末尾の「補記」を参照されたい。

なお、本誌第四号（二〇二三年二月一日発行）所載の同じキセリョフの『どの民族にも祖国はあるが、我々にあるのはロシアだ』は同じく『霊感を受けたロシア』の「**第二章**」に相当する。